



なごみ 日和 vol.20

和木町の活躍している
人を紹介します



伊藤ミカン園
代表 伊藤 雄紘さん

ミカン職人一家の軌跡とこれから

18歳の時に中和仁の実家を出て、東京で放送作家として働いていた伊藤雄紘さん。3年前に実家の伊藤ミカン園を継ぐため和木町に戻ってきましたが、元々、家業を継ぐつもりは全くありませんでした。「実家のミカンは東京の青果市場で高い評価を取っていると聞いていたけど、大変な仕事の割にそれほど儲かっているようには見えなかった。ミカン園も父親の代でなくなるのは仕方ないかなと思ってた」伊藤さんは30歳を過ぎたころ、お父さんが病気になったことをきっかけにミカン園の将来について考えます。伊藤家は80年以上続くミカン農家で、伊藤さんが4代目にあたります。伊藤さんのお父さんは、九州東海大学の研究を目的とした「モニター農家」に選ばれるなど、高い栽培技術がありました。量より質を優先し、少量でも味の良いミカンをつくるという考えの下、同じ品種の平均的なものより糖度の高いミカンを栽培していました。「技術があり商品の質は良いのだから、売り方を変えれば残せるのではないか」そう考えた伊藤さんは仕事を辞め、ミカン園を継ぐ決心をします。実家に戻った伊藤さんは、全体の相場で価格が決まる青果市場だけでなく、自分たちで価格を交渉できる販売先の開拓に取り組みました。そんな中、伊藤さんのミカンの味を評価してくれる関東の小売店とつながることができ取引を始めるようになりました。

さらに生産者の顔が見えるようにするため、伊藤ミカン園のパンフレットやホームページを作り、インターネットでの販売も開始しました。伊藤さんは販売の仕方をそれまでと大きく変える一方、先代の屋号を今も使い続けています。そこにはミカン栽培の技術など代々続く良いものは変えずに活かしていくという考えがあります。

今後はミカン園の法人化も視野に入れ、スタッフを雇用しチームの体制にすることで、質を保ちながら収穫も充実させていきたいと考えています。農家という職業に対して魅力を感じていなかったという伊藤さん。「これからどんどん農家が減っていく中で、農家が公務員や会社員と同じように仕事の選択肢の一つになってほしい。農業をやりたいという人にとってモデルになるような農家になりたい」と、想いを語ってくれました。

協力隊活動記 Vol.39

こんにちは、地域おこし協力隊の水上和磨です。年始に近所の「どんどこ」に初めて参加しました。天高く燃え上がる炎と竹の爆ぜる大きな音が印象的でした。今年一年健やかに過ごすことができそうです。また、前任の松下隊員の卒業に合わせて協力隊の活動報告会を開催しました。コロナ禍の影響もありオンラインでの開催になりましたが、町内外から約30人の方にご参加いただきました。当日の様子はインターネットでどなたでも見られるようになっています。お時間あればぜひご覧ください。

和木町地域おこし協力隊 YouTube チャンネル

